「生きて働く読解力の育成」を目指す指導法の研究　２０２３・８・１８
～目的をもって、情報を関連付けながら読み、考えをまとめる力を育てる授業づくり～

全国小学校国語教育研究所　協力員　山形県　向田　宏男

Ⅰ　はじめに

大塚健太郎教科調査官は、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善実施の中で、「資質・能力育成のための授業改善の視点」を論じる時、言語活動を行うことが目的となってはいないか、教材や言語活動から単元を考えてはいないかに着目し、目指すべきは、「資質・能力の育成」であることを強調されている。新指導要領（２０２０年度全面実施）の中で、「情報の扱い方に関する事項」が新設された。「情報を活用し、自分の考えにつなげ、文章にまとめること」は、読む目的が明確になっていなければ達成できないことである。この考えを踏襲して第１５年次研究副主題が位置付けられた。具体的に言えば、「考えの見える化」のための表現力（書くこと）育成となる。高学年における取り扱いに関する事項では「情報と情報の関係付けの仕方」→分類、類推、系統化と捉えている。榊原所長は、授業づくりの方策として、三つの言語活動（ゴールまでの道筋形成による言語活動力決定　発達段階に応じた言語活動設定　単元全体を通した言語活動の導入）について提案されている。さらに加えれば「考えの形成・発信・共有に関する指導」に重点を置いた実践研究が求められるとしている。

Ⅱ　情報活用で自分の考えをまとめ発表する学習の構想～高学年

～山形県白鷹町立東根小学校の事例から～

学校重点目標と関連させる。

重点４　深い郷土愛　「郷土を愛し、地域とつながる子供」

「社会に開かれた学校」～地域とのつながりを活かした教育活動の推進。

（ふるさと学習、生活科、総合的な学習、キャリア教育他）

↓

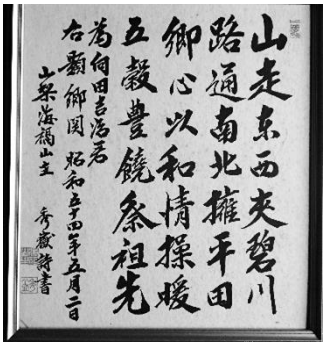
「東根人（ひがしねびと）」としての自覚と誇り

学習課題の設定　　東根地区の現状と課題を把握

白鷹町東根地区は、山川に囲まれ豊かな田園風景が広がる自然に恵まれた地域である。昭和５３年「白鷹町緑の少年団」が結成された。その中心となり活動したのが東根小である。現在、学校林の１つに「宝山（たからやま）」（本校北方６００m標高約５００m）がある。地区民有志（区長会）は、同年「宝山造園委員会」（山形県より表彰）を結成し、維持管理整備を今日まで継続中である。令和元年「白鷹町緑の少年団」が県の最優秀賞を受賞した。令和５年６月、みんなで森づくり（やまがた森の感謝祭２０２３・第７３回山形市植樹祭）が開催され、本校児童も参加した。県知事・山形市長を始め県内企業人も参加し、知事より「山形県CO2森林吸収量認定証書」が授与された。その時の資料「もりしあ」

（山形県環境エネルギー部みどり自然課発行2023年夏号)の表紙に本校児童が掲載された。この素晴らしい環境を将来につなげていく責任がある。ところで、現在の状況はどうであろうか。以下に示す課題は、山村地域では全国共通のものもあるようだ。参考にしたい。荒廃の恐れのある森林整備、少子高齢化問題、耕作放棄地問題、鳥獣被害問題、弱者社会問題など多くの課題を抱えている。特に豊かな自然環境破壊が少しずつ進行していく現状がある。東根地区の明るい未来実現のために、今からやるべきことをみんなで考え、住み良い地域づくりに貢献したい。そこで、この中から、「緑環境保全と最上川環境保全」問題を課題の１つにして取り組んでみることにした。

東根地域を分かりやすく表現した漢詩文（７言絶句）があるので紹介したい。
この額は、昭和５４年５月、山梨県海福山主（武田信玄縁の寺）毛利秀嶽氏（向田家の縁戚筋)から寄贈されたものである。山が東西に走り､その間を最上川が流れている。南北に道路(国道２８７号線)がつながり、その両側に田園風景が広がる。そこに住む人々は､仲がよく、全ての人々は心豊かである。実り豊かで､住み良い地域に作ってくれた祖先に感謝したい。



これを６年生に紹介したい。自分たちの住む地域が素晴らしい地域なのだということを再認識させたい。なお、この漢詩文は東根小創立９０周年記念事業の中の１つで副読本「東根の人々」(小学４年時に配本　右表紙絵）を発行した。このような事前学習を経て今回の授業実践に取り組んでいる。

さて、実際の事例であるが、「緑環境保全と最上川環境保全」問題を取り上げ、地域人、仲間などに新聞記事のような形にまとめて発表できることを前提にして取り組んだ。年表図表を活用して見やすく工夫したものにすることが条件である。グループで意見交換したり、改善点を見出したりして記事内容の充実を図った。ここで留意すべきことがある。指導者は、個々人の能力差に合った対応を工夫しなければならない。そのために、事前観察や事前指導の手を加え、それぞれにコミュニケーション能力（考えの見える化）を高めておきたい。そのような配慮により、一人ひとりの状況把握が可能になるはずである。完成した記事をグループごとに発表しあい、さらによりよい記事に仕上げることを促す。完成記事の発展として、環境に関わるグラフや図表を活用して記事を書いていたとすれば、「東根地区の環境キャンペーン」のように具体的な取組みを考えたい。「山の荒廃」がどのようなものかといった「山が泣いている！」や、最上川環境調査～「こんなに多いプラスチックゴミ！」のように児童の興味関心を誘う記事に仕上げたい。こういった取組みはまさに東根地区の喫緊の課題と成り得る。学校教育目標の重点４　深い郷土愛「郷土を愛し、地

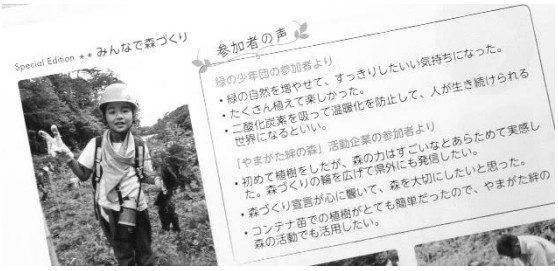
域とつながる子供」に直結する。このような学習構想を立てて取り組もうとしたのが今回の事例発表である。

Ⅲ　授業の実際

自然環境の保全活動の状況、森林整備によって発生した間伐材の有効活用、河川環境保全活動（ゴミ拾い等）の様子を通し、その背景を学習する。県民みんなで支える森づくり「山形緑環境税」の使い道などを通した学習は、本校「緑の少年団」活動に直結している。山や川は手入れされずに放置されれば、大変なことになる。このような背景があるので、関係者からお話や説明をしていただき資料とする（メモを取りながら）。また、ＮＰＯ法人関係者（最上川２２９ボランテイア管理者）の皆さんに話を聞いたり、それに見合った資料などを準備することが重要である事を学ぶ。報告すべき対象者は誰かを意識して内容の検討にかかる。資料準備後、どのような内容にしたら分かりやすいのか（相手に伝わるか）をグループ内で話し合う。

もりしあ・ＶＯＬ２３

山形県飯豊町白川湖水没林



ある程度のまとめができたら、お互いに聞き合う。資料の提示（表やグラフ）が適切かどうかもっと良くなる方法はないかなど、様々な視点から検討協議を重ねていく。活動の様子などをできるだけリアルに写真や図表にして表示していく。時間的順序は大切。これまでの立ち上げと今日までの経過を丁寧に報告する。数回に亘り行政の関係者による合同話し合い実施、高学年児童４３人全員の協力が前提であること、一人でも非協力者がいれば少年団活動はできないことなど、様々な課題を乗り越えて今日に至ったことの経過を踏まえて表にまとめる。これまでの活動を資料にまとめるため丹念に作業を進める。活動前の４月、事業計画に基づき内容を確認。その外、県や町の関係者に資料を準備し説明していただいた。ようやく目途が付き、活動開始となった。植樹方法は、以前のような手作業の必要がなくなりつつある。杉苗はポットに入っており、穴に埋め込むだけである。しかも雑草処理の薬剤散布もない。事後の下草刈も省力化されている。現在の苗は、無花粉苗となり、花粉症対策が施されている。しかも成長が早く成木時間が大幅に短縮されている。一方、事前学習での聞き取りは、事

前に調べたいことが何でどのような資料が必要かなど前もってお願いの依頼文を準備した。学習プリントを用意し臨んだ。以下に概要（まとめたもの）の一例を示す。

① 緑の少年団加入後の歴史

１９５８年	白鷹町緑の少年団加入
１９７３年	全国植樹祭金山大会参加
２０１９年	緑の少年団県優秀賞受賞
２０２３年	山形県「森の感謝祭」参加

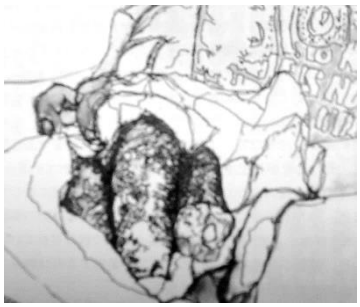
② 主な活動の様子

１９５８年	宝山整備始、下草刈り始
↓	児童保護者下草刈継続
１９６９年	創立 70 周年記念松茸狩実施
１９７６年	松茸狩中止　松枯病発生
２０１４年	創立90周年記念事業宝山整備

荒廃山の現状からの脱却

環境改善につながる
児童保護者で下草刈
地区民緑環境の保全に協力

森林資源はどう利活用されているか



松茸狩の思い出

県産のブナ材で造られた椅子

間伐材の利活用

③ 最上川環境保全状況まとめ

２０２２年	最上川 229ｋｍ環境美化参加
４月	ボートでの現状視察に学ぶ
↓	プラスチックゴミの現状と
	ボランテイア活動
２０２３年３月	プラゴミ等学習会
２０２３年９月	地域の河川環境保全活動参加

④ 全体のまとめ

教育目標重点４　深い郷土愛
「郷土を愛し、地域とつながる子供」に
環境保全無関心解消につながったこと
森林環境改善につながったこと
地元への愛情が伝わったこと

Ⅵ　終わりに

「生きて働く読解力の育成」は、自分の生き方に直結する。情報活用を通して自分の考えに活かし、文章化する行為は、自分の生活（生き方）をさらに豊かにする。何を学び、どのような力が付くのかを子供自身が感じとれるように育てたい。そのためには、何よりも教師の指導力が問われる。日頃から教材研究を怠らず、常に子供の目線を意識し、教師自身が成長する姿を子供たちと共有したいものである。

引用参考文献

山形県西置賜郡東根村郷土史　白鷹町立東根小学校要覧　山形県環境エネルギー部緑自然課会報誌　新学習指導要領　第 14 年次研究紀要他